

近松の女性像に関するノート

前 田 淑

近松は、その作品の中で当時の女性達をいろいろな角度からえがいている。そして、それらの女性の性格などについては、ほとんど研究しつくされているかのである。しかしながら、近松が何故このような多くの女性像をえがかなければならなかったのか。とくに、世話物にあらわれる、苦悩する女性の姿が、何故えがかれたのか。このような点について、従来の説は、必ずしもわたくしたちを十分に満足させるわけにはゆかないように思う。ほぼ同時代の作家であつた西鶴の浮世草子にえがかれた女性像とくらべるとき、元祿と享保という時代的な相違や、その作家としての態度などからだけでは解決のつかない点が見出される。浮世草子と浄瑠璃という文芸形態の相違も、作品そのものの側からだけでは、やはりこの問題を説明することはできない。以上のような点から、近松のえがく女性像について、わたくしなりに考えてみたいと思う。

近松は女性の悲劇をえがいた作家といふことができる。しかも、その底に流れるものは、「をなごと生れし此あんぐわ」(夕霧阿波鳴門)、「をなごに生れたあんぐはじや」(同)という、宿命のかなしみであり、近松は、このような女性に対して、「ふびんなり」(同)と評している。「女に生れた因果」ということばによつてあ

らわされる女性の負い目は、実にそれから二百五十年をへた今日、なお、わたくしたち女性の上から、完全に消え去つてはいない。文学が人間生活とのつながりにおいて研究されるものであるならば、わたくしたちは、このことをなおざりにするわけにはゆかないのである。

いつの時代においても、時代のしわよせは、もつとも無力な女性達の上におそいかかる。近世封建社会における幾多の矛盾と、それによる苦悩とを、もつとも大きく背負わなければならなかったのは女性であつた。もちろん、近世の女性が全く無力であつたとはいえない。近松の作品にみえるように、一家の主婦として、あるいは遊女としての社会環境から人間的な自覚が生れており、そこから彼女たちの抵抗が生じていることをみのがしてはならない。「曾根崎心中」のお初、「天の網島」の小春、「冥途の飛脚」の梅川、「丹波の与作」の小方などのような遊女にしても、あるいは、「重井筒」のお辰、「天の網島」のおさん、「寿の門松」のお菊たちのような人妻にしても、それぞれの場で、時代の矛盾とたたかいながら、二重三重のおい目を背負つて必死に生きようとしているのである。むしろ、そうした彼女たちの時代への抵抗を裏切つたのは、世話物の主人公であつた男性であつた。

では、何故近松はこのような女性像を、この時代において、かくもリアルにとらえ得たのであろうか。わたくしは、これを、彼の文学の享受層の面から考えてみたいと思う。

西鶴の文学にあらわれる女性像と近松の女性像とはいちじるしくことなっている。たとえば西鶴がその好色物でえがいたような

太夫の位の遊女を近松はほとんどえがかなかつた。しかも、西鶴は、遊女を遊里の女王としてえがき、男も名代の者は恋をしても死んだりしないし、遊女も太夫ほどのものは死んだりしない、心中するのは端女郎のしわざであると、蔑視している。これに対して、近松のえがいたのは多く端女郎であつた。もちろん、夕霧（夕霧阿波鳴門）や、吾妻（寿の門松・淀鯉出世滝徳）のような松の位の遊女をえがいてはいるけれども、それは遊里の女王としての彼女たちではなく、一見はなやかな生活のかげにかくされた奴隷としての彼女たちの姿である。近松のえがいた多くの遊女は、封建社会における下級町人や農村の娘たちであり、家の貧窮のために売られた女性であつた。年貢未進のために水牢に入れられた父をたすけるため遊女になつた「丹波の与作」の小万、借金のかたに父に売られた「重井筒」のお房、その母が大阪の南辺に賃仕事をしてほそぼそくらしている「天の網島」の小春、叔母夫婦の貧窮をみかねて自分から身を売つた「心中刃は氷の朔日」の小勘など、かぞえあげればきりがなくあろう。また、同じ題材をとらえながら、「五人女」のお夏、おまん、おさんと、近松のそれは、そのえがき方がいちじるしくことなつてゐる。これらの差は、一体どこから来るものであろうか。心中は端女郎のするものと軽蔑した西鶴に対して、何故近松は心中物をあれほど多くえがいたのであろう。

近松は時代物の一つである「井筒業平河内通」の中で、業平が高安家の女中から山椒太夫の一曲を所望されてきかせるところをえがいており、「女中衆聞あわれいてか、哀あわれなか／＼と、いへ共きよろり

と女房達、涙が出そうで出かねて、哀そうで何ともない、ア、泣たやとぞさゞめきける」と女房達の様子を描写している。この一節は、彼の古浄瑠璃に対する冷評であると同時に、当時の浄瑠璃の享受層に相当数の女性があつたことをものごたるものである。これらの女性たちが、彼の作品の大きな推進力となつてゐることをみのがしてはならないと思う。日本文芸史の中で、女性がその享受層において大きな位置をしめたのはどのような時代であつたであろう。あの古代民謡や伝説の中にえがかれた女性像の背後には、やはりそれらを享受した女性達があつた。しかし、その時代には文芸の生産者と消費者とは明確に分離しておらず、女性をもふくめた集団によつて、創造され、かつ享受されたのである。したがつて、享受層として、創造する作家と対蹠的な位置を女性をもつようになつた最初の時代は、やはり源氏物語を中心とした宮廷女流文学の全盛期であつたといふことが出来る。この時代には、創造の側にもまた多くの女性があつた。これらの作品群がどのような享受層をもち、どのように読者と交流したかといふことは、いまだあきらかにされてはいないし、またその研究は困難をとまなうものである。しかし、たとえば更級日記の中にみられる源氏物語へのはげしいあこがれは、その一つのあらわれとみることがで、蜻蛉や源氏にあらわれた「女性の苦悩」の背後に、どのような女性の読者たちのささえ方があつたかといふことは、興味ある問題ではないだろうか。狂言の場合にも、やはり女性の享受層があつたことが予想される。しかしながら、この近世の浄瑠璃に至つて、はじめて日本文芸史は、広く女性の享受層を獲得したので

はないかと思う。しかもそれは、近世社会の貨幣経済機構の上から、文芸の創造が職業としてなり立つ時代であつた。

近松の作品の背後には、彼の文学をささえる女性たちがあつた。作品と社会との関係は直接的には享受層と作品とのつながりにおいて考えなければならない。とくに端女郎とよばれる下級遊女や、町人階級の主婦や娘たち、お針子のような当時の勤労女性など、そういった人たちが、近松の人形芝居の観客の何割かをしめてゐることは考えられないことではないであらう。近松にえがかれた農民性が、やはり彼の作品の享受層であつた大阪京都近郊の農民層をぬきにしては考えられないように、彼のえがく女性像の背後に、観客としての女性達を予想しなければならぬと思う。彼女たちは、その日常生活の中で、女性としての負い目をおわされてゐた。その苦しみや歎きは、もはや彼女たちと無縁の世界をえがいた古浄瑠璃ではなくさめられなかつた。彼女たちは、いつかは我が身の上となるかもしれない同じ端女郎の心中に涙をながし、夫の遊女狂いに歎く人妻に共感するような作品の出現を期待した。「ああ泣きたや」と絶叫した女性たちの、有形無形の力にささえられて、近松はあれだけの女性像をえがき得たのである。それは、彼の作品が直接に興行という企業につながる近世社会において、作者として観客を把握するためにとるべき必然的な方向であつた。

しかし西鶴の場合はそうではない。彼の作品の享受層に女性を考えることは先ず困難であらう。彼の作品は男性の、しかも大部分は上層町人のものであつた。出版費も高価であり、とくに文字

で書かれた読む文学としての浮世草子の享受層に、近松のような女性層を予想することはほとんど不可能である。したがつて、彼の作品は、好色物にせよ、町人物にせよ、あるいは武家物、雑話物にせよ、おおむね男性の読者を予想して書かれてゐる。ことに暉峻康隆氏のいわれるように、「胸算用」よりは「永代蔵」の方が売れたといふことは、彼の作品が、うけとる側において、その文学的価値より、実生活における実用的価値の方に重点がおかれ（彼自身の意図と関係なく）、西鶴文学の享受層であつた近世町人が、彼の作品に何を求めたかを如実に物語るものであらう。そのようにみるならば、彼が多くの遊女をえがいた「一代男」などは、上層町人にとつては一種の遊里案内記や評判記の役目をはたしたとみるべきであり、それはいわゆる「買い手ども」の側からみた遊女の世界であつた。同様に、「好色一代女」や「好色五人女」などが、「封建的矛盾をすどくうけ、自由の意識をもつて封建的拘束のなかで抵抗しながら、やがては傷つき敗れていかなければならなかつた」女性たちをえがいてゐるにしても、それは女性の側からではなく、男性の側からみた女性像であつた。そこには、近松の場合のように、封建社会に生きる女性に負わされた苦悩を、女性の側から理解し、それをえがき出す作家の場を発見することは不可能である。

近松の女性像の特質は、以上のように享受層の側からもつと研究されなければならないと思う。もちろん、同時代に海音、出雲、つづいて半二という作家たちがあり、これらの作品もまた多くの女性の享受層を得ている。しかし彼らには近松のような女性像は

もはやえがけなかつた。その点からいえば、「愛の人」とよばれる近松の、作家としての観察力や、作者としての技倆を高く評価しなければならぬ。また、近松の時代を境として、しだいに鋭くなる封建社会の矛盾の中で、もはや近松の時代ほど典型的な女性像をえがけなかつた浄瑠璃作者たちの無気力は批判さるべきであらう。それにもかかわらず、女性の苦悩がテーマの中で書きつづけられたことは、視覚と聴覚とによつて享受しうる劇文学の享受層に、やはり多くの女性が参加していたことを物語るものである。

日本文学の研究が、益田勝実氏のいわれるように、「自分の国の、自分らの先祖からの生命が通つているもので、人間が生きているということの意味を確め^{註3}」るためのものであるならば、わたくしたちは以上のような点にもつと注目すべきであらう。つぎの時代の文学を如何に創造すべきか、また、明日への生活のエネルギーとして文学は如何に研究されなければならないかは、わたくしたちの立場から、もつと真剣に思惟されなければならないと思うのである。

註1 文学 昭和三十年三月号「日本文学研究の歩み」参照

註2 森山重雄「近世封建文学の課題」(「日本文学の傳統と創造」所収) 一二七頁参照

註3 文学 昭和三十年三月号「日本文学研究の歩み」参照

—— 本学助手 ——